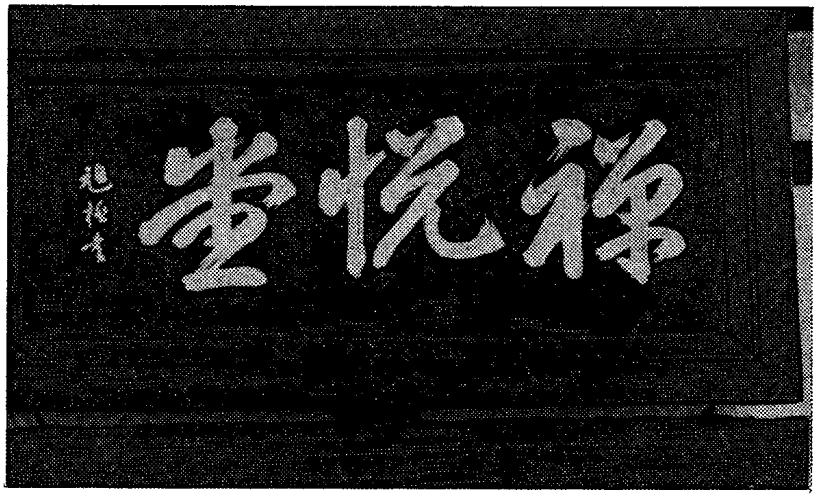
頑極官慶師自賛画像

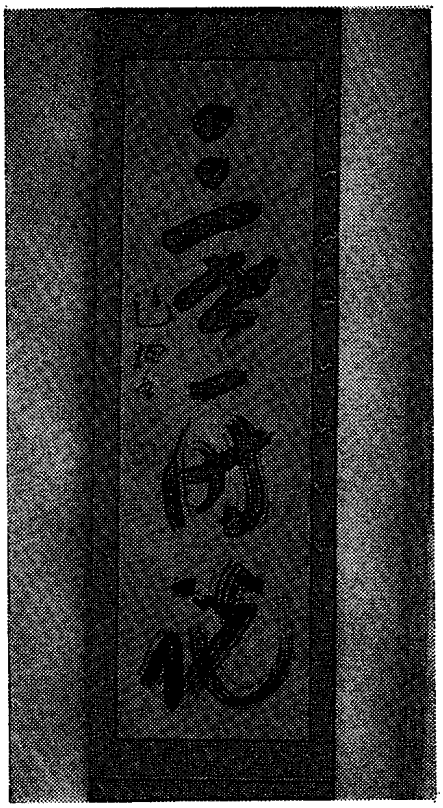
三重県 東雲文庫蔵

頑極師筆　道字賛

三重県 東雲文庫蔵



頑極師筆　本堂額
愛知県乾坤院蔵



頑極師筆　五字一行書
三重県東雲文庫蔵

頑極師筆　能天白山之書
三重県東雲文庫蔵

新資料による
頑極官慶と尾張新豊寺の研究

田島柏堂

一　研究資料について

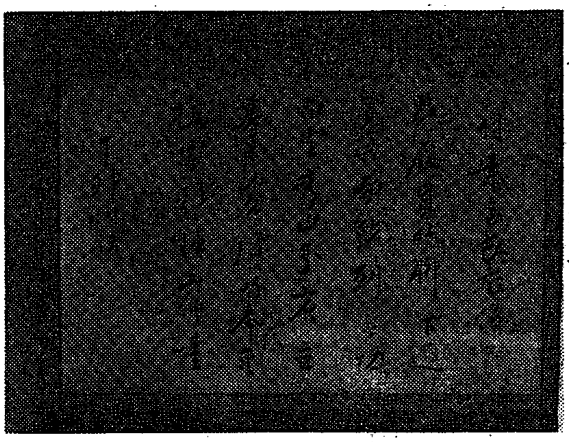
頑極官慶（がんごくかんけい）は、江戸中期すなわち十七世紀の末葉より十八世紀の中葉にかけて生存された洞門の禅匠で、当時済門の白隠慧鶴（一六八五～一七六八）と並び称せられた程の人物である。[1] 頑極は明峰派の月舟下、黙子素淵（月舟宗胡―徳翁良高の法嗣）の法嗣である。かの永平寺五十世に晋住し、祖規の復古と『正法眼蔵』の開版等に偉大なる業績を残され[2]た玄透即中を初め三十余人（『新豊頑極和尚年譜』による。『曹洞宗大系譜』には四十四人を記載す）[3]の嗣法の弟子がある。頑極の生涯における行動については、玄透の編纂した『新豊頑極和尚年譜』（文化二年跋・『曹洞宗全書』史伝下所収）一巻があり、また思想・禅風について知るには、『頑極官

慶語録』（大興超禅・玄透即中・大応知有等編・安永九年刊・『続曹洞宗全書』巻四、語録二所収）二巻が存する。伝記としては単独の別伝（単伝体）として著わされたものは存しない。しかし総伝体（列伝体）の中に含まれているものには、『近世禅林言行録』（森大狂編・明治三十五年刊）・『近古禅林叢談』（森大狂編・大正八年刊）・『仏教信仰実話全集⑱・禅宗篇（続）』（清泉芳巌編・昭和六年刊）・『尾張人物志』（写本・天野信景著・市立刈谷図書館・名古屋市立鶴舞中央図書館等蔵）・『名古屋市史・人物編第二』（名古屋市役所編・昭和九年刊）・『続篇書画一覧』（文隆園主人編・文政五年刊・国立国会図書館・東京大学図書館・京都大学図書館等蔵）がある。いずれも前記の『年譜』或は『語録』を基にして纏めた略伝がそれぞれ収録されている。また筆蹟については、『近世禅林墨

蹟・曹洞編』（鏡島元隆編）の「道字賛」や『続曹洞宗全書』所収の口絵「自賛画像」によって知ることができる。いずれも三重県津市東雲寺 東雲 文庫 所蔵のものであるが、同文庫にはこのほかに、頑 極の墨 蹟を數幅 襲蔵されている（**以上、写真参照**）。その他、岡山県倉敷市円通寺二世（雄禅良英）頂相の賛、[4] 愛知県の乾坤院本堂額（**写真参照**）、大阪府豊中市の仏眼寺僧堂額、三重県下の瑞光寺山門額、正安寺本堂額、呑湖院本堂額、薬師庵本堂額[5]なども、すべて頑極の筆蹟であることを付言しておく。

二　頑極官慶と新豊寺

そもそも頑極は、天和三年（一六八三）十月二十七日、肥前（長崎県）諫早（いさはや）に生まれ、元禄元年（一六八八）四月八日十一歳にて近くの天祐寺（諫早市西小路町所在）の住持月門宗吾（十七世）について得度し、十六歳にて皓台寺（長崎市寺町所在）湛元自澄（六世）に菩薩戒を受け、二十歳江戸に出て旃檀林に学び、内外典を精究した。のち徳翁良高、無得良悟、天桂伝尊、卍山道白、拈華実参、智燈照玄、あるいは黄檗宗の千呆性侊等の諸禅匠に歴参し、享保六年（一七二一）遂に法を肥前慶闇（けいげん）寺（佐賀市本庄町所在）の黙子素淵（十五世）に嗣いだ。その後、頑極は同十一年（四十四歳）秋より同二十年（五十三歳）まで但馬永源寺（兵庫県養父（やぶ）郡八鹿（よおか）町所在）に住し（八世）、次いで同年十月一日、先の天祐寺に寛保三年（一七四三・六十一歳）春まで住山し（二十世）、同年三月十一日より延享三年（一七四七・六十四歳）春まで近江清涼寺（彦根市古沢町所在）に在住し（〔十一世〕なるも、脱牌して〔前住〕とす。[6]）さらに寛延三年（一七五〇・六十八歳）九月より宝暦十年（一七六〇・七十八歳）九月まで尾張新豊寺（現在は廃寺）を董し、その間、同元年（一七四八・六十六歳）夏から秋まで約三箇月、伊勢の東雲寺（三重県津市垂水所在）に住し（第三世）、[7] 同十一年（七十九歳）夏より明和四年（一七六七・八十五歳）十二月十日入寂まで摂津仏眼寺（大阪府豊中市熊野町所在）に住山（開闢二世）されている。なお『年譜』の宝暦十一年の項には



頑極師筆　付素玄長老偈
三重県　東雲文庫蔵

「春、還二新豊一燕居五旬、夏返二仏眼一」とあるから、頑極は宝暦十年九月仏眼寺に入寺したが、その冬には尾張海蔵寺（半田市乙川所在）の結制・授戒会を済ませ、翌十一年春には再び新豊寺に帰り、五十日間燕居されているので同寺には事実上、約十年住山していたことが知られる。もちろん頑極は、一面、「篇聚律儀に汲汲とせず、諧達無礙放昿洒落」（『新豊頑極和尚年譜』五五七頁）な禅僧であったので、定住することを好まず、前掲の六箇寺に住持中全国各地の結制・授戒会等に応請しているから、実際に各寺に居住されていた期間は、上記の期日より短縮されることはいうまでもない。しかしいずれにしても新豊寺住山期間と他の五箇寺における住山期間とを比較すると、新豊寺は最も長期にわたっており、玄透が『年譜』に特に「新豊」の寺名を冠したことが首肯される。新豊寺は、かように頑極について由緒のある寺院であるにもかかわらずいつの間にか廃寺となり、その故址も定かでないことは甚だ遺憾である。殊に私は名古屋の寺院に住持している関係上、是非新豊寺の事蹟について明らかにしたいと思い、早くから頑極に関する文献史料の蒐集や実地踏査を行なったのであるが、不明な点が多かった。しかるに一昨年、「頑極官慶師と新豊寺について」（「続曹洞宗全書会報」第二号・昭和四十九年六月刊）の稿を執筆の際、再び資料の採訪と同寺の故址等の捜査に努力した結果、漸くその事蹟等について確認することができたので、その一部を発表した。その後、引続き資料の収集に傾注したところ、幸い新資料が続出し、これを中心に今年本学において開催された第二十七回日本印度学仏教学会学術大会において発表（五十一年六月六日・『印度学仏教学研究』第二十五巻第二号〈五十二年三月刊〉所収）したのである。またその後にも未見の資料に接することができたので、ここに稿を改めて、頑極の新豊寺住山時代における行動と、同寺の旧址、歴住世代などについて、詳しく究明したいと思う。

三　新豊寺の開創と法門の繁興

新豊寺の開創については、『年譜』寛延二年（一七四九）の項によれば「今茲春距二尾陽城一西方一里許、有二毘（ママ）比津邑一、邑有二薬師古道場一、教禅二僧交住無レ有二定度一、時為二虚席一、先レ是大興、将二為レ師ト一菟裘之地一、其意太急、故住二観音一席未レ煖已抵二尾城一、風二諭外護県吏等一、故吏輩挙二此道場一属レ興、興喜而受レ之、委レ質修治、以邀レ師焉、

師怡々如而底止、後号二新豊一者本此」とあり、翌同三年の項には「九月至二尾陽一、大興以為城西道場其地卑湿矣、不レ可二老人棲息以介一於眉寿一不レ若為レ之易レ地也、尾陽城東行一俱廬舎、有二川名邨一、塏爽之地在二于此一、若レ岡若レ陵、松杉扶疎、宜レ建二梵刹一、外護某捐レ金購得属レ興、興得レ之驩甚、時金城有二廃寺号一、興又諭レ吏請相二譲寺号一、吏応レ之、然乃徙二道場于川名一、凡百転輸吏力是頼、堂宇落成、請レ師為二鼻祖一、師便山号二鳳凰一、寺名二新豊一、蓋改レ浄而為二禅曹洞一、故爾乃得二官許一云、即日就二寝堂一小参之役也、大興可レ謂是勤矣」と見えている。『頑極官慶語録』巻上の「住尾州鳳凰山新豊禅寺語録」にも「寛延三年庚午秋九月上澣師自二東関一至二尾陽一、嗣子大興預創二建新豊禅寺一、恭請レ師以為二開山祖一、即日就二方丈一示衆、末後郎当掀二鳳山一、分明一句到二牢関一、仏来祖訪難二窺測一、把二住要津一堪レ養レ閒」、「宝暦三年癸酉仲春、移二寺基於川名山一殿宇落成、因奉二薬師観音二尊一安座、稽首三界調御師、千百億化無二方所一、東方世界作二医王一、南西北方燃二法炬一、薬師仏陀強安レ名、観音妙智用雙拳、雨竹風松門豁開、霊感相応衆病除、大衆且道有二何憑拠一、竪レ拂曰、有レ水皆含レ月、無二山不一レ帯レ雲」[8]と記されており、同録巻下には「宝暦三年癸酉之冬、小師大興移二新豊之故址於川名山上一、四衆竭レ力鼎建已成焉、山水清秀経禅之佳境也、因賦二偈一章一示レ衆兼誌レ喜云」と題し、「トレ地不肯築二法城一、投二老薬山一愜二野情一、山不レ高兮水且浅……象骨老人曽有レ道、欲下将二此地一為中長生上、……挙二話頭一来慶二落成一、……川名山頂非二人世一、白雲朝暮送又迎」[9]云々との長文が記載されている。また尾張藩の大代官樋口好古の著わした『尾張徇行記』（寛政四年春起稿、文政五年五月完稿）巻一（名古屋市鶴舞中央図書館蔵）愛知郡の部、「川名村」の項には「一　新豊寺書上帳ニ、境内一反三畝、外ニ控山五町三反五畝十六歩共ニ年貢地〇此寺草創ハ旧此寺名古屋笹屋町ニアリテ善国寺ト云、頑極長老寛延元辰年右寺号を譲受、愛知郡日比津村薬師堂ヲ再建シテ一寺ニ取立、新豊寺ト改号シ、宝暦三酉年今ノ所エ易地セリ、元浄土宗ナリシカ寛延辰年曹洞宗ニ改宗ス」[10]、「一　同野方山（新田頭源兵衛支配）四十七反八畝廿歩新豊寺控、内畠三反四畝八歩松山八畝歩同二町一反歩同二町二反六畝十二歩、定納米一石三斗九升八合」[11]、「一　同野方山（新田頭源兵衛支配）五町四反八畝十六歩新豊寺控、内屋敷二畝九歩田三畝十六歩畠七反二畝二十八歩松山四町六反九畝廿三歩、定納米一石七斗六升九合」[12]と詳細に記録されている。さらに尾張藩の書物奉行深田正韶（まさつぐ）の著『尾張志』（天保三年起稿、弘化二年十二月二十四日完稿・杉本蘭皐書写稿本、名古屋

市蓬左文庫蔵）愛知郡の部「禅宗曹洞派」の項には「同村（川名村）にありて鳳凰山といふ、遠江国城東郡兒隣村少林寺の末なり、寛延元年辰十月創建す、薬師仏を本尊とす」と記されている。そこで少林寺（静岡県掛川市子隣所在）を調査したところ、同寺には次に述べる新豊寺の大興超禅より少林寺三世梅機宗明に宛た宝暦四年（一七五四）八月二日付の「本寺願」の文書が襲蔵されていることが判明した。従って新豊寺は、頑極の本師黙子素淵を開山祖とする少林寺の末寺であったことが知られる。

さらに叙上の資料に基き新豊寺の開創について按ずるに同寺は頑極の法嗣、大和観音寺（奈良県吉野郡吉野町所在）の住持大興超禅が、寛延二年尾張の地に来たり、名古屋城の西方一里程の距離にある愛知郡日比津村（現在の名古屋市中村区日比津町地内）の薬師堂（無住）を手に入れ、ここを師匠のために隠棲の地（菟裘之地）としようと志した。このことを官に申請したところ許可を得たので、直ちにこの建物を修理して師を迎えることにした。しかるに日比津の地は、地面が低く湿気が多いので、老体の師匠に健康で長寿が保たれるようにするためには、却って不適当な場所であることがわかった。幸いに同郡の川名村に丘陵の地で、しかも寺院を建立するのに適当な場所が見つかったので、ある外護者の寄進を得てこれを購入することができた。そして浄土宗の「善国寺」（名古屋笹屋町所在）という廃寺の寺号を譲受け、寛延三年九月の初めには、堂宇が落成したので、大興は師匠を招請して同寺の開山祖としたのである。そこで頑極は当寺を曹洞宗に改め、さらに旧寺号を廃して、新たに鳳凰山新豊寺と名づけられた。これが官許を得たので公称することになった。頑極はこのとき（九月九日）左のごとく「鳳山規約」五箇条をつくり、日用の行持を中国の石霜慶諸の枯木堂、汾陽善昭の七八衆に擬え、これを厳行すべきことを規定されておる（『語録』巻下）。

鳳山規約

一　行乞不レ随レ衆者罰
一　作務不レ随レ衆者罰
一　課誦不レ随レ衆者罰
一　坐禅経行不レ随レ衆者罰
一　仏忌祖忌行乞不レ帰レ菴者罰

寛延庚午重陽日　開闢頑極老衲立[14]

また宝暦三年仲春には、堂宇を川名山上、山水清秀経禅の佳境の地に移し、この冬諸堂が円備した。『年譜』宝暦

三年の項にも「師七十一歳、……新豊之堂構益備」と記されている。なお新豊寺の境内地および年貢地、畠、山林、定納米などの寺有財産が、司農の職分にあった大代官樋口好古の筆によって細かく数字があげられているので、当時における同寺門を維持する経済機構の様子を窺知することができる。因みに『尾張徇行記』の「寛延元辰年右寺号を譲受」、『尾張志』の「寛延元年辰十月創建す」とあるはいずれも「寛延三年」の誤りであることを付言しておく。

頑極は、寛延三年新豊寺の開創より、宝暦十一年夏、仏眼寺退住までの間に、尾張の永安寺・香積院・清涼寺、三河（愛知県）の本光寺、遠江の少林寺、伊勢（三重県）の東雲寺・清光院、肥前の天祐寺、長門（山口県）の功山寺、備中（岡山県）の円通寺などの結制・授戒会・遠諱法要などに応請され、四衆接化に席の暖ることがなかった程である。殊に宝暦七年（一七五七）夏には、新豊寺において開堂演法結制の盛典を挙げられ、その参列の僧衆八百人を数え、また六月には授戒会を啓建し、僧俗受戒者合わせて二百五十人を数え、それぞれ盛大に厳修されたことを伝えている（『年譜』・『語録』）。[15] 如上の活動より推して、頑極が当代稀に見るいかに高徳の宗匠であったかということを、十分窺い知ることができるであろう。

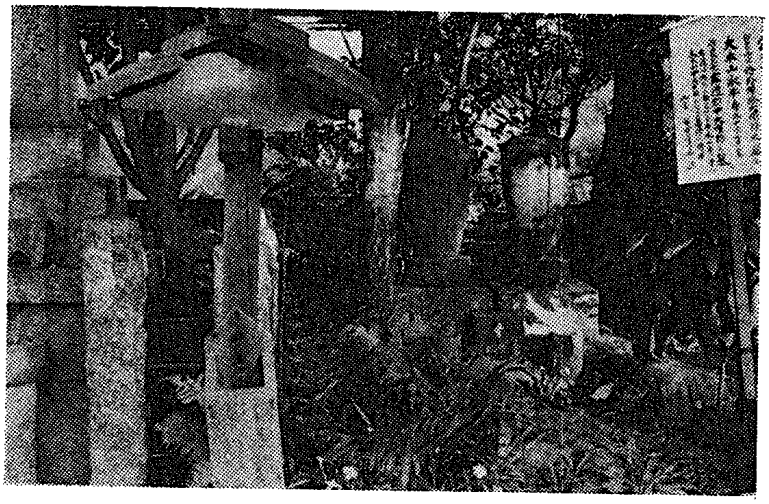
四　新豊寺の旧址について

しかるに、頑極のごとき偉大なる人物が住持された新豊寺も、いつ頃か廃寺になってしまい、その旧址も定かでない。ところが『名古屋市史・人物編第二』の頑極の略伝を見ると、その末尾に「墓は新豊寺（今廃寺となる、東山育児院南山寮の地なり）にあり」と注目すべき割注が記されている。[16] 私はこのことを知るや直ちに現在の愛知育児院南山寮（東山育児院とあるは誤りである）を訪れ、資料調査したところ同院の『概要書』に「明治四十二年四月、御器所村大字広路字南山、鳳凰山新豊寺の寺跡地を譲り受けて、収容施設を移し、南山寮と称

新豊寺旧址

す」と明細に記録されていることがわかった。さらに『愛知県写真帖・愛知県編』（大正二年刊）・『愛知県史』（大正十五年刊）・『明治の名古屋』（昭和四十三年刊）には、それぞれ当時の同育児院の写真と右の年月に同地に移築落成したことを明記している。ここにおいて新豊寺の所在地は今の名古屋市昭和区南山町五丁目の地籍であることを確認することができた。従って同寺は明治四十二年四月以前に廃絶したことが推考される。伝えるところによれば、いつ頃か不明であるが、同寺の伽藍は火災にあって焼失し、その後再建したが、また暴風のために倒壊するという不幸が続き、[17]遂にそのまま復興されなかったといわれているが、この点については、いずれにも確証がない。この土地の面積は、道路の拡張などによって現在三千三坪を有し、この中に仏教精神を基盤とした社会福祉法人「養護施設南山寮」と「保育所南山ルンビニー保育園」を経営している施設であるが、この敷地全体がもとの新豊寺境内に相当し、この位置がすなわち今より約二百二十余年前、同寺の伽藍が建立された地点である。この場所は丘陵であって、その下方には隼人池が眺められ、前掲の『語録』・『年譜』のなかに記されている「若レ岡若レ陵松杉扶疎」、「山不レ高兮水浅」、「山水清秀経禅之佳境也」などとある言葉と全く符節を合する地形にある。現在はその周辺に多くの建物が立込んできているが、この一角は今もなお松杉が疎らに茂り、ここに佇むと往古における同寺の面影が彷彿として眼前に浮んでくる環境にある。（**前頁写真参照**）。

次に上述のごとく『名古屋市史』には、頑極の墓は新豊寺にあることを指摘しているが、現在この「愛知育児院南山寮」の地域には存しない。『名古屋史蹟名勝紀要』・『名古屋の史蹟と文化財』などには、新福寺（半僧坊・臨済宗方向寺派、昭和区広路町所在）境内に剣聖宮本武蔵の碑があることを記している。[18]新福寺は、



宮本武蔵の供養碑（左端）

新豊寺　**三世玄透即中師の墓**（右）
四世燈外禅燈師の墓（左）

明治四十三年十月静岡県浜名郡伊佐見村人見より現在地に移転したものであって（『愛知郡史』第九編）、新豊寺廃絶後の翌年に建立されている。たまたま私は、この宮本武蔵の碑が、もと新豊寺にあったものであることを知ることができたので、同寺に赴き調査したところ、新福寺住持よりもそのことに間違いないとの確答を得た。しかし同寺には頑極の墓はなく、宮本武蔵の碑の傍らの少し奥まったところには思いがけもなく卵塔の正面に、「當寺三世玄透中大和尚」・「當寺四世燈外燈大和尚」と刻んだ両師の墓が並べられており（**前頁写真参照**）、その向側には、自然石の正面に「読誦大乗（以下磨滅して不明）」、左側面には「文政十一年戊子二月吉旦、当山五世大俊叟建焉」と二行に彫刻したいわゆる大乗経典読誦供養塔が新豊寺五世大俊によって建てられている（**写真参照**）。またその側には、「浄翁塚」、「如々菴一夢建之」および辞世（和歌）と「天保十四年癸卯正月朔日寂」と刻した円筒形の小塔、その他新豊寺境内より移した庭石などが周辺に散在している。如上の墓碑等は、いずれも新豊寺の旧址にあったものであるが、昭和十二年（一九三七）七月、道路拡張のため、その近くにあるこの新福寺境内に移し預けられたということである。[19]

大乗経典読誦供養塔
（新豊寺五世大俊建立）

五　新豊寺の歴住世代

そこで、ここに新豊寺の歴住世代について考察することにしよう。同寺の開祖は、『新豊頑極和尚年譜』に「請レ師為二鼻祖一」とあり、「新豊禅寺語録」にも「嗣子大興預創二建新豊禅寺一、恭請レ師以為二開山祖一」とあり、また『尾張人物志』・『続篇書画一覧』にも「尾州八事村鳳凰山新豊寺開基」（傍注に「川名村歟」と記す）と見えているごとく、頑極であることは云うまでない。しかるに『大系譜』には「尾張新豊寺二世」と記されており、また当寺第二代住持の人名の記録が見当らなかったので、私は『大系譜』の記載に基き、先に発表した拙稿に、[20]「同寺の開山祖も仏眼寺と同様に、頑極は師匠の黙子素淵を開山に勧請し、自らは第二代の住持を董したことがわかる。従って大系譜に尾張新豊寺二世と見えていることが肯ける」と推定しておいた。

しかしその後、永平寺所蔵の『萊翁黙仙和尚語録』（写本）のなかの「新豊寺大興和尚小祥忌語」に「恭惟当山第二世大興禅大和尚今月今日遇小祥忌辰」[21]という記録を見出すことができ、第二代の住持職は、大興超禅であることが判明したので、ここに訂正しておく。因みに萊翁黙仙は頑極の法嗣で、大興は法兄に当っており、かの摂津仏眼寺六世玄透の後をついで第七世を董し、また尾張仏音寺（愛知県西春日井郡春日村所在）の二世となった人で、『頑極官慶語録』の末尾、助刻者の芳名中にも「尾州仏音黙仙」の名が見えている。[22]

第二代の住持大興は、前叙のごとく頑極の法嗣で、玄透即中の法兄に当り。大和の観音寺[23]に住していたが、寛延二年（一七四九）尾張の地に来たり、新豊寺の全伽藍を建立し、ここに頑極を招請して開山祖に仰ぎ、同寺開創のために尽瘁した陰の人で、非常に師匠思いの人であったことが窺われる。頑極は『年譜』によれば「宝暦十年庚辰、師七十八歳、…時仏眼造営輪奐尽レ美矣、九月師入寺、追三請先師黙老和尚レ、為三開山始祖一、自居三次位一」[24]とあるから、宝暦十年（一七六〇）九月に摂津仏眼寺に入山されていることがわかる。従って大興は、頑極が仏眼寺へ転住した後席を受け継いで、新豊寺第二代の住持を董したことになる。その後いつ頃まで住山していたかというに、玄透が明和五年（一七六八）、伊勢正安寺より新豊寺へ晋住したことを伝えているから、[25]大興は、宝暦十年九月より明和五年に至る約八年間ほど住山していたことが推考される。しかし大興は、同寺開創の寛延三年九月以来、頑極と共に居住した年数を加算すると、およそ十八年間にわたって在寺していたことになる。大興は、あらゆる苦難を克服して、新豊寺を創建し、頑極と共に寺門の機構整備をはかり、尾張の地に曹洞の禅風を挙揚したことは、宗門の地方発展史上大いに注目すべき事柄である。もって萊翁は、その『語録』の中に「賀三新豊勝会一」と題し、「吾兄禅公功偉哉、請レ師締構浄梵臺、撮三耕遊径一計三閑坐一、変三動絃歌一聴三喝雷一、覚苑拈レ華方法立、心田挿レ草大義開、一戦猶未三揮レ戈了一、亦是三舎残照回一」[26]と述べ、大興の偉大なる業績を賞嘆している。

因みに、頑極は摂津仏眼寺において明和四年（一七六七）十二月十日入寂しているが、この報一度新豊寺に伝えられるや、大興の悲しみはどんなであったろう。その愁嘆も人

一倍深かったことと察せられる。萊翁には「悼二本師老和尚示寂一」題し、「嗟師示寂何夫駛　月冷風寒通體慵　雙樹枝頭空止レ鳥　連河波底不蔵レ龍　鸞兒転レ地鳳凰嶺　雁塔曬レ天熊耳峯　違レ命直饒到　曠劫一悲惀　號泣痛摧レ窄胷　新豊寺山謂鳳凰山　仏眼寺山曰熊耳山」と、その『語録』に記されているが、弟子たちがいかに悲涙号泣して頑極の示寂を悼んだか、その愁嘆の程が偲ばれる。次いで大興は、萊翁を請して、頑極の初願忌法要を営修している。

於新豊寺先師和尚一七日香語

太古鳳音豈レ堕レ情、聲鳴三天下一元無聲、

末頭錯奏新豊曲、餘韻落レ聞洗不レ清、(28)

その後、大興は安永四年（一七七五）六月二十七日、仏眼寺（三世）の大応知有（頑極の法嗣・「新豊禅寺語録」を編纂す・寛政二年三月二十一日寂）が加賀天徳院（石川県金沢市小立野所在）に晋住したので、その後席を襲い仏眼寺第四代の住持を董した。(29) このとき萊翁は、大興の仏眼寺開堂式典の同門疏を撰し、(30) また次のごとき偈を呈して、その入院を賀している。

賀仏眼大興禅師結制開堂

荷三負於千鈞一毛一、乾坤坐断化門高、

爛藤横拈活龍勢、巻上浪華萬丈涛、(31)

さらに玄透も左のごとき賀偈を呈している。

賀三仏眼大興和尚開二演堂演法一

已墜宏網弛復張、依稀八十老虚堂、

一声獅吼驚レ群曰、孰憶阿爺坐三道場一(32)

この偈によれば、当時、大興はすでに八十歳に達していたことが知られる。

なお大興は、『頑極官慶語録』編纂の際、「天祐禅寺語録」を編集し、また安永九年（一七八〇）十二月、『語録』開版のときは、その資財者の一人として「摂州前仏眼超禅」(33) の名が見えている。これにより大興超禅は、当時すでに仏眼寺を退住していたことが知られうる。大興の示寂年月について、その関係寺院を調査したが、全く不明である。しかし前述の萊翁の「新豊寺大興和尚小祥忌」法語に「饒一聲能令孰レ知一信聞何有三去来儀一鳥啼花笑春三月芳草緑揚歸與時　恭惟當山第二世大興禅大和尚今月今日遇三小祥忌辰一継席燈公為三其師一設三大斎会一教山僧焚一レ香予如三亦不一レ能レ免二伯仲之儀一以レ何奉献　倒把三少林無孔笛一逆風吹了順風

吹〻咄」[34]

とあるから、大興は燈外が新豊寺住山中（一七七一―一七九四）の安永九年以後の年三月に、九十歳前後の高令にて示寂したことが推定される。このたびはからずも第二代の住持は、大興であることがわかり、またその住山期間も明らかとなり、さらに大興の風格、業績についても窺知することができたことは、まことに幸いである。

次に第三代は、敍上の玄透の卵塔に「當寺三世玄透中大和尚」と刻記されているから、大興の後を継いで玄透が第三代の住持を董したことが知られる。『大系譜』・『日本仏家人名辞書』・『禅学辞典』所収の玄透の項には、新豊寺に住持されたことについては記載していないが、『愛知県偉人伝』・『名古屋市史・人物編第二』の玄透の伝には「新豊寺三世」[35]と明記している。

玄透は、号を空華庵、玄野翁、断索道人という。尾張葉栗郡杉山村（愛知県一宮市杉山）の出身で、享保十四年（一七二九）に生まれ、七歳のとき同丹羽郡三井邑各方寺（一宮市丹陽町三ツ井所在）徳巌維馨について得度し、寛保元年（一七四一）徳巌が伊勢法蔵寺（松坂市深長所在）へ転住したので、ここに隨侍すること數年。翌二年遠江少林寺（掛川市子隣所在）の黙子素淵（徳翁良高の法嗣）に相見し、二十歳の頃、伊勢東雲寺（津市垂水所在）二世頑極の門に投じ、宝暦五年（一七五五）十一月、ついに尾張新豊寺にて住持頑極にその法を嗣いだ。その後明和二年（一七六五）伊勢正安寺（鈴鹿市磯山町所在）に首先住職し（二世中興）、同五年（一七六八）新豊寺第三代の住持を董した。このとき莱翁は、玄透に祝偈を呈上している。

賀玄透禅師住新豊　仏殿法語有乾屎橛語

拈一堆乾屎橛来、瑠璃殿上白毫開、
先師下筆　開山有薬病　待君手薬病相治実快哉[36]

この年、玄透は頑極の小祥忌を、その翌年には大祥忌の法要を厳修している。その時の法語が、『空華庵録』に見えている。

新豊頑老忌

満腔毒気(憋カ)埋蔵、若得(憋カ)児孫哭小祥、
報徳曾無三点語、酬レ冤只有一枝香、

同

三遇忌辰焼柏根、何須沼沚采蘋蘩、
這般供養雖眞率、不レ負蒿枝拂著恩、

玄透は、同寺にいつ頃まで在住していたかというに、

退院の偈に「幻寓三年誇る能わず」とあり、また明和八年（一七七一・四三歳）秋、美濃武儀郡上有知（こうづち）村善応寺（美濃市吉川町所在）十一世に董住されているから、明和五年から同八年秋に至る約三年の短い期間であったことが窺知される。[38]

のち玄透は、摂津仏眼寺（六世）、美濃徳巌寺（九世）、備中円通寺（十一世）、武蔵龍穏寺（四十七世）に歴住し、さらに永平寺（五十世・洞宗宏振禅師）に晋住して、同寺の伽藍復興、祖規の復古、『正法眼蔵』の開版等に、偉大なる業績を残されたことは著名である。永平寺在住十一年間善応寺の隠寮空華台において、文化四年（一八〇七）四月二十八日、七十九歳で示寂された。法嗣二十余人がある。なお玄透は、『頑極官慶語録』編纂の際、「仏眼禅寺語録」を編集し、開版のときは施財者の一人として、「濃州善応即中」の名が記されている。[39]『新豊頑極和尚年譜』一巻、『永平小清規』三巻、『祖規復古雑稿』一巻、『祖規復古餘稿』一巻、『円通応用清規』一巻および『語録』（『空華庵録』・『空華餘稿』）各一巻[40]の著がある。因みに『尾張人物志』にも「玄透和尚」の名が見えている。

第四代は、叙上のごとく燈外禅燈の卵塔に「當寺四世」と刻記されているから、玄透の後を継いで燈外が第四代の住持職を董したことがわかる。燈外は、『大系譜』によれば、頑極の法嗣となっている。しかるに玄透の『空華庵録』には、「円通法姪燈外禅師眞像賛」[41]と記している。従って燈外は、玄透の法兄弟の法嗣であることが知られる。燈外は新豊寺二世大興超禅の室に入って嗣法したことを伝えているので、[42]燈外は大興の法嗣なのである。燈外は、明和八年秋、玄透が新豊寺を退董した後へ進住し、またのち寛政六年（一七九四）十一月には、玄透が備中円通寺を退住したので、その後席（十二世）を董している。されば燈外はおよそ二十三年間新豊寺に住山していたことになる。

燈外の行実については、全く不明であったが、このたび諸種の史料から断片的ではあるがこれを収集することができたので、次に述べることとしよう。

燈外は、『張城人物志』（写本・梵韶著・安永七年序・国立国会図書館・市立岩瀬文庫・市立鶴舞中央図書館蔵）・『尾張人物志』によれば、尾張八事山の真言宗興正寺諦忍律師（一七〇五―一七八六）とともに列挙されているほどの高

僧である。燈外は、新豊寺において大興の結制中に首座となったので、萊翁はこのとき祝偈を呈している。

賀禅燈首座

自如不レ效庸流禅一　讃賞有言未発先一
果視解袍安投夕　一燈挑起照人夫一[43]

また萊翁の『語録』には、安永六年（一七七七）九月に「新豊開山忌丁酉九月香語」と題し、「十一年前動大千之乎者也不虚伝因思昔日紫胡狗斫牌漢猶擔一肩」とあり、安永八年（一七七九）六月に「先師十三回忌香語新豊寺結制中」と題し、「肉団猶暖十三霜須見萊氏焼爛香重把炎雲要打着松風六月価難量」とあり、同九年（一七八〇）には、「先師老和尚祥忌」と題し、「蘆月蘸霜十四回松雲影裏迎真来而今憶着當時事寒入骨成七八枚」[44]と見えているから、燈外は萊翁を導師に招聘して、新豊寺開山頑極の祥月忌または十三回忌の法要を厳修したことが知られる。さらに前敍のごとく、安永九年以後の年三月には、同じく萊翁を請して二世大興の一周忌法会を營弁している。なお同九年に開版した『頑極語録』の末尾、助刻者の芳名中に、先の大興、玄透のほか、新豊寺有縁の尾張在住の僧尼・在俗の男女合わせて十九員が記されているが、そのなかに「尾州新豊禅燈」の名も見えている。[45]

また島根県安来市松源寺所蔵の『長栄静高和尚開堂録』には、三つの疏が集録されているが、そのうち最後の疏の末尾に、「天明萬李良月令旦、城震鳳皇山新豊禅寺禅燈九拜、謹撰」[46]と三行に記されている。この疏は、尾張長栄寺（名古屋市中区梅川町所在）十一世の臥山静高（定保慧胤の法嗣、萬松寺二十四世・宋吉寺二世・大光院十九世、文化八年〈一八一一〉十二月六日寂）[47]が、天明六年（一七八六）四月同寺に晋住し結制開堂を行なった際、燈外により撰書したものであることが知られる。なおこの『開堂録』は、表紙共僅か十紙（袋綴）の写本で、先年、曹洞宗全書刊行会の資料調査によって発見されたものであることを付言しておく。

さらに、前記新福寺に所在の宮本武蔵（一五八四―一六四五）[48]の碑は、かつて新豊寺境内に建立されていたものであるが、この碑文も燈外の撰書したものである。「新免政名供養碑」と呼ばれ、寛政五年（一七九三）五月十九日、円明流の末葉市川長之がその門人と共に燈外に依頼し、宮本武蔵の命日に百四十九年忌の法要を営んだ際建てたのである。如上の事蹟により、燈外がいかにすぐれた宗匠であったかということが知られよう。

その後、燈外は寛政六年に備中円通寺へ転住した。同寺には、燈外の筆になる「円通常住、祠堂銀寄附記簿」[49]が現存している。燈外は同寺において享和二年（一八〇二）三月二十三日示寂された。墓は同寺にはないが、前述のごとく新豊寺に存する。次いで翌三年二月（仲春）に、復庵遵古（玄透即中の法嗣・円通寺十三世）[50]は、燈外の頂相に賛を書いている。なお六月、玄透は別の燈外の頂相に賛を乞われ、左のごとく記している（**次頁写真参照**）。

眞何得レ似、似則非レ眞、豁二一圓裡一、全無二一人一普陀鳳嶺出興地、觸処光明萬古新、

享和二癸亥林鐘　勅賜洞宗宏振禅師永平玄透老衲[51]書

〈倉敷市円通寺蔵〉

文化元年（一八〇四）には、燈外の三回忌の法会が厳修され、この時の玄透の法語が『空華庵録』に見えている。

円通禅燈和尚三回諱

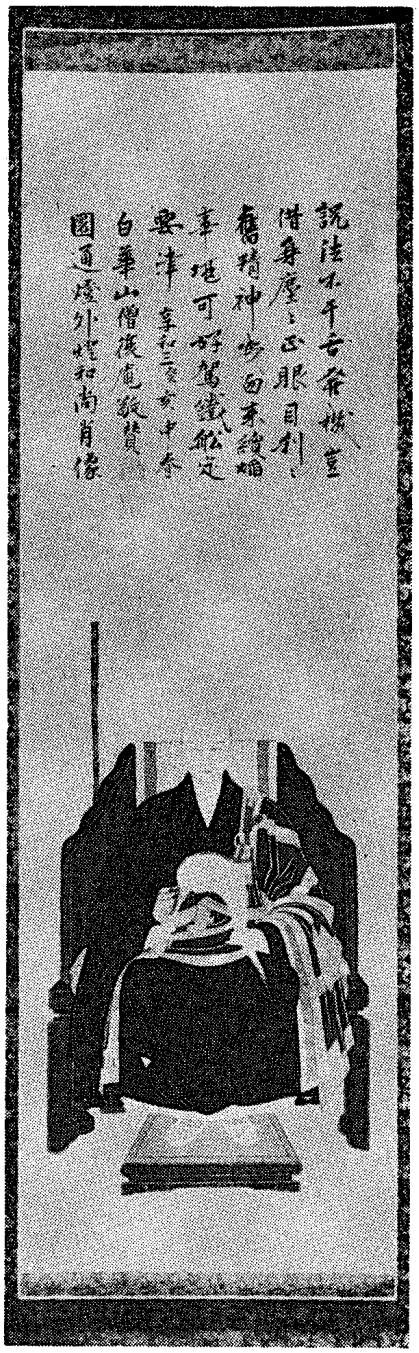
阿師幻滅既三年、此日僅修幻祭筵、

顚倒衆生不レ了レ幻、幻叢空対百花妍、[52]

右の画像および玄透の賛、法語などによって、燈外の生前中における偉大なる風格を窺い知ることができる。なお燈外の寂後十九年目、すなわち文政三年（一八二〇）、字林萬喬が尾張春養寺（名古屋市熱田区旗屋町所在）を再興し、燈外を法地開山に勧請している。[53]

第五代の住持は、「大乗経典読誦供養塔」の左側面に「文政十一年戊子二月吉旦、当山五世大俊叟建焉」と見えているから、大俊であることがわかる。禅燈が新豊寺より円通寺へ進住したのは、寛政六年（一七九四）十一月であるから、大俊はこのとき新豊寺を董して以来、文政十一年（一八二八）まで三十四年間住山しておることになる。その後、いつ頃まで在住されたか不明である。他に所見がないので、いかなる人物であったか明らかにすることができない。その後、前にも触れたように新豊寺境内には、天保十四年（一八四三）一夢なる人物によって「浄翁塚」の塔が建立されている。思うに、新豊寺は開闢以来、頑極、大興、玄透、燈外などの著名な宗匠が住持となり、それぞれ洞上の禅風を挙揚されたのであるが、のちこれが廃寺となったことは、返す返すも残念である。

以上、頑極と新豊寺の旧址、歴住世代などについて緻密に考究した結果、寛延三年開創より天保十四年頃までの事蹟についてだいたいを窺知することができた。しかしこれよりのち明治四十二年四月南山寮の所有となるまでの六十



（復庵遵古師賛）

（玄透即中師賛）

燈外禅燈師画像

岡山県　　円通寺蔵

有余年間の消息は、依然として不明である。この点まことに遺憾である。さらに今後の究明を俟って明らかにしたいと思う。なお頑極の教学・禅風については、他日、稿を改めて論及する予定である。最後に、新豊寺の歴住世代について、その法系図を掲げておく。（五一・一〇・一五、百周年記念式典の佳辰）

◉新豊寺歴住世代の法系図

新豊寺開山
黙子素淵
肥前慶闇寺十五世
備中西来寺五世
伯耆退休寺二世
備中梅長院開山
伊勢東雲寺開山
遠江少林寺開山
摂津仏眼寺開山
（その他省略）

頑極官慶
但馬永源寺八世
肥前天祐寺二十世
近江清涼寺〈前住〉
摂津仏眼寺開闢二世
伊勢東雲寺二世

新豊寺開闢二世
大興超禅
大和観音寺
摂津仏眼寺四世

新豊寺三世
玄透即中
伊勢正安寺二世
美濃善応寺十一世
摂津仏眼寺六世
美濃徳巌寺九世
備中円通寺十一世
武蔵龍穏寺四十七世
永平寺五十世

新豊寺四世
燈外禅燈
備中円通寺十二世
尾張春養寺法地開山

〈法系不詳〉
新豊寺五世
大俊

【注】

（1）『続篇書画一覧』・『尾張人物志』「頑極」の項には、「尾州八事村鳳凰山新豊寺開基、白隠同時ノ人気格与白隠伯仲ス然モ世人無言、嗚呼名聲ノ顯晦亦如斯乎」と見えている。新資料による頑極官慶と尾張新豊寺の研究（田島）

（2）『曹洞宗全書』史伝下、五五七頁。

（3）『曹洞宗大系譜』一〇一～一〇三頁。なお摂津仏眼寺五世高玄徳淳〈頑極の法嗣〉が記した『頑老師正続玄鑑』（同寺蔵）には、四十三人の名が見えている。

(4) 吉川彰準師「第二世雄禅良英和尚」（『良寛修行と玉島』一九八頁）。

(5) 仏眼寺の「牛棟」、瑞光寺の「河上山」、正安寺の「白雲山」、呑湖院の「龍雲山」、薬師庵の「医王」の各字が、いずれも頑極の筆蹟である。以上のうち瑞光寺以下は、三重県東雲寺住持坪内秀孝師の報告による。

(6) 村瀬篤信師『彦根清涼』（「歴住」七頁・「前住」九～一〇頁）。なお延享三年（一七四七）三月二十日崑山元瑞が清涼寺第十一代の住持に晋住しているから、頑極はそれ以前に退住していることがわかる。

(7) 黙子素淵は、名倉氏の創建にかかる霊亀山東雲寺に招請されることになっていたが、同寺の諸堂建築が数年を要し、黙子は竣工前の延享三年六月二十日入寂した。そこで頑極は、同寺に約三箇月住し、師の黙子を開山祖に請し、自らは（開闢）二世となった。頑極は、尾張宗円寺（名古屋市西区名塚町所在）の住持（十一世）透関素玄（頑極の法嗣）を呼び寄せて第三代の住持とした。『黙子和尚年譜』（『曹洞宗全書』史伝下、四九四頁）、『頑極官慶語録』（『続曹洞宗全書』語録二、四八二頁）。なお東雲寺には、頑極が延享四年（丁卯）仲秋に書いた「付素玄長老偈」（**三二頁写真参照**）が襲蔵されている。

(8) 『続曹洞宗全書』語録二、四七三頁。

(9) 『続曹洞宗全書』語録二、四九〇頁。

(10) 『名古屋市史』（社寺編、第十節廃寺、第七款浄土宗）善国寺の項に、「善国寺は朝日山と号し、笹屋町（本重町東南角）に在りき、境内五十坪（役地）有り、平僧地にして性高院の末寺なり、開基詳ならず、薬師堂一宇ありき、寛延元年十月、畳寺となり、愛知郡日比津村薬師堂（南寺町善篇寺の控）に譲れり（寺社志、性高院由緒書、市譜張州府志略、尾張名陽図会）」（一〇一九頁）と記している。

(11)・(12) 『名古屋叢書』続編巻四、四三頁。

(13) 『名古屋叢書』続編巻四、四五頁。

(14) 『続曹洞宗全書』語録二、四九三頁。

(15) 『曹洞宗全書』史伝下、五五五頁、『続曹洞宗全書』語録二、四七三～四七四頁。

(16) 『名古屋市史』（人物編、第二）五六八頁。

(17) 山田秋衛氏「宮本武蔵考」二、新豊寺の碑（「名古屋新聞」昭和十二年六月二十五日付）。

(18)・(19) 『名古屋史蹟名勝紀要』一四六―一四七頁、『名古屋の史蹟と文化財』二六七頁、剣聖武蔵来遊の碑発見（「名古屋新聞」昭和十二年六月二十二日付）、山田秋衛氏「宮本武蔵考」一・二新豊寺の碑（「名古屋新聞」昭和十三年六月二十四・二十五日付）、鬼頭素朗氏「剣聖宮本武蔵と尾張」

四、八事半僧坊の碑（「名古屋新聞」昭和十三年三月四日付）。

(20) 「頑極官慶師と新豊寺について」（「続曹洞宗全書会報」第二号、五頁）。

(21) 『莱翁黙仙和尚語録』三六丁表。

(22) 『続曹洞宗全書』語録二、四九四頁。仏音寺の開山祖は、佳雲恩陵で、この和尚の木像が安置してある。莱翁黙仙は、同寺の二世であるが世代牌は存しない。また仏眼寺にも住山しているので、同寺と仏音の両寺を調査したが、いずれも示寂年月は不詳。

(23) 観音寺の「歴住簿」には不記載、従って示寂年月日も不詳。

(24) 『新豊頑極和尚年譜』（『曹洞宗全書』史伝下、五五五～五五六頁）。

(25) 吉川彰準師「玄透即中和尚」（『良寛修行と玉島』六一頁）。

(26) 『莱翁黙仙和尚語録』一一丁表～裏。

(27) 『莱翁黙仙和尚語録』一二丁裏。

(28) 『莱翁黙仙和尚語録』一二丁裏～一三丁裏。

(29) 『大応禅師語録』・『莱翁黙仙和尚語録』二五丁表～裏。莱翁の語録には「天徳大応禅師進山開堂同門疏」が記載されている。

(30) 『莱翁黙仙和尚語録』二六丁裏～二七丁表。

(31) 『莱翁黙仙和尚語録』三三丁表。

(32) 『空華庵録』（『続曹洞宗全書』語録三、二五六頁）。

(33) 『頑極官慶語録』（『続曹洞宗全書』語録二、四五八～四六七頁・四九四頁）。因みに仏眼寺は、大興の後住（五世）に、高玄徳淳（天明八年七月十四日寂）が晋住している。

(34) 『莱翁黙仙和尚語録』三六丁表～裏。法語の冒頭にある「𠮟」の字は、「チ」と読む。樂器の名で、横笛の一種。長さ、支那尺で一尺四寸、周囲三寸、八孔を有する。

(35) 『愛知県偉人伝』一七八頁、『名古屋市史』（人物編、第三）五六九頁。

(36) 『莱翁黙仙和尚語録』一二丁表。

(37) 『空華庵録』（『続曹洞宗全書』語録三、二六四頁）。

(38) 吉川彰準師「玄透即中和尚」（『良寛修行と玉島』六一頁、同師編「永平五十世、玄透即中禅師年譜」（「傘松」三九一号、三五頁）。

(39) 『頑極官慶語録』四七五～四七八頁。四九四頁。

(40) 『永平小清規』（『曹洞宗全書』清規）、『祖規復古雑稿』（『続曹洞宗全書』清規）、『円通応用清規』（同上）、『空華庵録』（『続曹洞宗全書』語録三）、関口道潤師編「玄透禅師法語集」（「傘松」三九一号）。なお玄透即中については、吉川彰準師「玄透禅師研究」（「曹洞公論」昭和三六年一月～三七年一一月号）、同「玄透禅師」（『道元禅』

伝と人物）、同「永平五十世玄透禅師小伝」（「傘松」昭和二七年九月～三〇年一一月号）、野乃花香蔵師『玄透即中の思想とその誓願』（前・後篇）、笛岡自照師「五十世玄透禅師と眼蔵開板」（『永平寺雑考』二四六～二八七頁）、永峰文男氏「玄透禅師と本山版正法眼蔵の刊行」（「傘松」三九一号）、田島柏堂「正法眼蔵の開版と萬肯尼」（「傘松」二三四号）、同「正法眼蔵の開版を資助した萬肯尼」（『曹洞宗尼僧史』二五七～二六〇頁）、吉川博道師「永平玄透禅師と大乗曇瑞禅師」（「傘松」三八三号）などの論著がある。

(41) 『空華庵録』（『続曹洞宗全書』語録三、二八〇頁）。

(42) 吉川彰準師「開山と歴代」〈第十二世、灯外禅灯和尚〉（『良寛修行と玉島』二〇六～二〇七頁）。

(43) 『莱翁黙仙和尚語録』一三丁裏。

(44) 以上は、『莱翁黙仙和尚語録』三五丁表、三七丁裏、四一丁裏。「先師老和尚祥忌」の法語末尾の下には「雖二然恁麼一昔年巴陵有二三転語一今日山僧一句又無祇偏重二先師末後拋レ筆不レ綴レ言」と記している。

(45) 『頑極官慶語録』四九四頁。

(46) 『長栄静高和尚開堂録』六丁裏～九丁裏。

(47) 峨山韶碩―通幻寂霊―石屋眞梁―竹居正猷―器之為璠―全巌東純―天甫存佐―助翁永扶…定保慧胤―臥山静高。臥山静高は、尾張海東郡甚目寺村（愛知県海部郡甚目寺町）の出身。長栄寺に住すること二十四年、大光院に十一年、萬松寺に六年住山し、七十三歳のとき長栄寺明星庵に退隠し、七十五歳にて入寂した。臥山は、法系の上で、私より六代前の禅匠である。『曹洞宗大系譜』二四三頁、「萬松寺歴住諸位」（『亀山志』〈名古屋萬松寺史〉付）三頁、『尾張人物志』、『名古屋市史』（人物編、第二）五七三～五七四頁、『名古屋市史』（社寺編）「長栄寺」六四一～六四四頁、「宋吉寺」五九五頁、「大光院」六二二頁。

(48) 宮本武蔵は、天正十二年生～正保二年五月十九日没。江戸時代初期の剣術家、画家。美作宮本村に生まれ、名は政名、号は二天、父は十手の名人平田（または新免）無二斎武仁、諸国を遊歴して武術を磨き、二刀流を開いて二天流開祖となった。武蔵の伝は、多分に伝説化されているが、剣聖として武名を謳われている。著書には『五輪書』などがある。

(49) 野乃花香蔵「玄透即中の思想とその誓願」七五頁。

(50) 復庵遵古は、初め美濃善応寺（十五世）を董し、寛政の末頃より享和三年（一八〇三）まで円通寺（十三世）の住持となる。数年にして大阪鳳林寺（十三世）へ転住、文化十一年（一八一四）円通寺にて示寂。玄透が寛永七年（一六三〇）永平寺に晋住するや随侍し、監院として玄透禅師の補佐につと

めた（吉川彰準師「第十三世復庵遵古和尚」＜『良寛修行と玉島』＞二〇七頁）。

(51) 『空華庵録』（『続曹洞宗全書』語録三、二八〇頁）には、「円通法姪燈外禅師眞像賛」と題しているが、「享和二…玄透老衲書」の署名は記されていない。倉敷市円通寺所蔵の眞像賛（吉川彰準師「第十二世燈外禅燈和尚」＜『良寛修行と玉島』＞二〇七頁）には、「円通法姪…眞像賛」の十一字は書いてない。

(52) 『空華庵録』（『続曹洞宗全書』語録三、二八五頁）。

(53) 春養寺は、亀丘山と号し、祥光荷公（寛永十四年十二月三日寂）が曹洞宗に改め、寛永三年（一六二六）嬾桂（尾張法持寺七世、寛永九年八月七日寂）が同寺に隠棲していた。『名古屋市史』（社寺編）、「春養寺」六五九頁。

〔昭和五十一年度文部省科学研究費（総合研究・A）による研究成果の一部〕

【付記】

このたびの研究調査に対して、種々ご協力を賜った国立国会図書館・駒沢大学図書館・県立愛知図書館・市立鶴舞中央図書館・市立刈谷図書館・市立岩瀬文庫・曹洞宗全書刊行会および長崎県諫早市新資料による頑極官慶と尾張新豊寺の研究（田島）天祐寺住持水野弘元博士・彦根市清涼寺住持村瀬信行師・岡山県倉敷市円通寺住持矢吹憲道師・三重県津市東雲寺住持坪内秀孝師等に対し、甚深の謝意を表する。

◇

元正示衆

新豊一曲奏二陽春一、今古断絃続調新、
脩竹青松老梅樹、正中妙挾自天眞、

涅槃忌拈香

本来常住如如仏、宝印當レ空示二涅槃一、
到頭一著刹那頃、擬議二千七百年、

仏成道拈香

拳頭一隻化二明星一、錯錯錯時突眼睛、
雪嶺夜闌寒徹レ骨、同時成道盌鳴聲、

「新豊禅寺語録」（『頑極官慶語録』巻上所収）

◇